

しろ、明治二・三十年代のロマンチスト以上の華やかな世界を幻想し、設定したのである。白秋の青春期は、近代日本文学の青春期に一應いるどりをそえたことは、たしかであるが、その一方に、近代資本主義の発展による矛盾の解決にその青春期をかたどつた石川啄木がいたことを考え合せてみると、白秋の青春と啄木の青春という二つの典型が明治末期の社会的現象をよく説明していると思うのである。

(一九四九・六・二五)

言葉の社会的行為過程

岩

永

胖

言葉は行為のものではない。行為が物質的肉体的行為として確立するところでは、言葉は消滅する。だが言葉は行為の反映であり、行為を呼ぶ行為である。人間は言葉なしには、人間的な共同の行為を形成することができない。現実の社会に於ける人間の行為は日常的私的行為と社会的公共的行為に分けることができる。それ故に、社会に於ける言葉はまたこの人間の行為を對應的に反映し、日常的な、私的な言葉と社会的な公共的な言葉に分けられる。それは普通は生活用語と理論用語の対立として意識せられているものである。

日常的な、私的な言葉は直接に物質的過程と交渉する日常的生活的行為の過程を反映して感覚的に成立し、理論的な公共的な言葉は日常的・生活的な行為過程を否定し、それと対立する社会的公共的過程を反映して抽象的に確立する。ひとしく物質的過程にその源泉を有し、共に本質的には物質的であるとしても、日常的な言葉が直接に物質的現実的過程と交渉する人間の行為の感覚的反映として物質的利益に対して敏感な感覚的反映であり、かゝる日常的行為を呼ぶものとすれば、理論的な言葉はむしろかゝる卑俗な日常的な行為過程を否定する公共的な行為過程の反映として、感覺性をできるだけ脱却した抽象的思維

的な行為を呼ぶものである。ジャーナルに対するアイデアとして、理論的な言葉は日常的な言葉に対立しているのである。

人間の言葉は総体的には、かゝる日常的なものと理論的なものの対立し、統一する過程として現れる。それは人間の行為過程そのものが、日常的な私的な過程と公共的な一般的な過程との対立し、統一する過程としてその全体を形成する反映である。

人間相互の關係は日常的な言葉の行為として最も具体的に物質的に現れ、理論的な言葉の行為として最も総体的に、抽象的に現れる。日常的な言葉は衣食住に關聯ある直接的な感覺的な人間關係の反映であり、理論的な言葉は肉体的感覺的な生活關係に対立して、しかもそれらの衣食住の感覺的生活の結合して形成する人間の総体的公共的生活の反映である。

だが、人間の行為そのものは全く別個の、日常的なものと公共的なものとに分離しているのではない。具体的には人間の行為はつねに統一されて、全体としての社会的統一關係のうちに動いてゐるのである。

日常的な行為以外に、人間は具体的に行為をもつてあらうが、われわれはそのような行為を発見することはできない。公共的行為といわれるものといえども、日常的な感覺的行為として現れるのでなければ、行為とはなり得ないのである。

行為は感覺的でなければ、もともと行為たり得ない。それ故に、日常的行為以外に総体的な、公共的な行為であるというのは、そもそも如何なる魔術によるのであらうか。

ところが、階級対立の社会に於ては誰でもが自己の日常生活を自己の創意に基いて改造し、変革する自由をもっているのではない。個々の自由なる日常的行為の總和が社会的公共的行為たるのではない。日常的行為そのものはかえつて社会によつて與えられ、社会が日常的行為を規正し、それを支配し、それに対立する公共的行為形成の根源たるのである。

人間は感覺的に日常的な言葉として、物質的過程と交渉する日常的行為過程を反映するが、それを累計しても人間が社会的に共同的に、公共的に物質過程と交渉する行為を反映することはできない。日常的な言葉をあつめて、之を総計し、受容し、抽象しても、物質過程の社会的交渉の行為過程を反映するものは出てこない。それは個々の日常的な行為過程を集計的に反映する言葉の普遍性を得ることはできるかも知れないが社会に關する理論としての言葉にはなり得ない。何となれば、日常的行為

為そのものは人間の社会的公共的行為によつて規正され、むしろそれから與えられているからである。かゝる行為過程の反映は、かゝる過程の現実的な具体的な反映以外に求める方法はない。如何に與えられた日常的行为を正しく反映するとしても與える公共的な行為の反映にはなり得ないのである。

理論は人間相互の、社会に於ける日常的行为を人間に與え、それを支配する者のみが形成する。日常的行为を支配するとはそもそも如何なる訳であろうか。本来なら、日常的行为を支配するものは、日常的行为者そのものであるべきである。だが行為をその行為をする者が支配するというのは殆んど單なる言い換えにひとしいのではあるまいか。日常的行为と日常的行为者とは共に、日常的行为と日常的行为者にあらずる者によつて支配されるのでなければならぬ。

ところで、支配とはそもそも何であろうか。それはもろもろの、雑多なものが一の意志によつて動くということであり、そのものの意志の枠内に於てのみ自由があるということである。

日常的行为はかゝる支配者に依つて、一の統一体として全体を形成する。だが、支配者はほしいまゝに、自己の意志によつて、日常的行为を律し、それを組織し得るのではない。

日常的行为そのもののうちに、かゝる支配關係を支持し確立する要素があるのでなければならぬ。支配される者の側に即して考えれば、支配とは人間の日常的行为が共同し組織化される謂いである。日常的行为が日常的行为として確立するために人間相互の間に一定の組織を確立する。かゝる組織は確立されるや否や、全体として組織される者とその行為とを規正する。それは生ける統一体として、一定の意志を以て日常的行为を決定する。

大衆の日常的行为とその利益に背反して、公共的な行為が行われる社会が少数者支配の階級社会である。支配階級は一定の階級の日常的行为と利益の犠牲に於て存在するのであるが、かゝる社会に於て理論的な公共的な言葉は大衆の日常的行为と對立する。それは大衆の感覚と對立する抽象性を以て現れる。理論的な言葉がその日常性と感覺性をもつのは支配階級にとつただけである。支配階級はその社会の、公共的な行為過程が彼自身の日常的行为過程であり、それ故に彼の日常的行为過程そのものが公共過程であり、理論と日常的行为とが彼にあつては一体化しているのである。

人間の日常的な言葉の行為は物質過程の感覺的部分的反映であり、日常的行為そのものの部分である。

ところで日常的行為として物質的過程と交渉する以外になお人間の物質的過程との交渉があり得るであろうか。工場に於て生産し、事務をとり、或いは衣食住的な諸々の行為は、人間にとつてまさしく日常的行為であり、それは人間の物質過程と交渉し、或いは人間の相互に關係する行為のすべてである。

だが、われわれは個々の日常的行為を反映する日常的な言葉はもち得ても、その總括的な反映たる理論的な公共的な言葉をそれと同時に現實的にもつてゐるとは限らない。人間の日常的行為が統一的に總括的に把握せられるところにのみ物質的過程と交渉する人間の行為の總体が反映される。人間の対立する個々のさまざまな、種別をもつ日常的行為がその總ての領域に於て要約されるのは支配者であり、その階級である。

支配者階級の支配者的な日常的行為はそれと対立する被支配者の日常的行為の總体的把握である。

被支配者の日常的行為が農村、工場に於て生産し、事務をとる行為として、感覺的であるに對し、支配者的な日常的行為はそれを整理し、統計し、または変更する行為として抽象的である。被支配者的な日常的行為が肉体的物質的、感覺的であるに對し、支配者的な日常的行為は、精神的意識的抽象的である。

被支配階級たる労働者・農民・小市民の日常的行為を把握する支配階級たる資本家・地主・官僚の支配者的な日常的行為は精神的抽象的であると共に、その日常性を保持する限り、感覺的物質的である。

資本家・地主・官僚たる支配階級は自己のために、自己の衣食住のために、工場・農村・社会を經營し、被支配者階級はかゝるものとして組織されることなしには日常的行為を形成し得ないが故に、進んでかゝる組織の、従つて支配階級の把握と支配の下に身を置かざるを得ない。支配階級は利得し、收奪するために、被支配階級は收奪されることのうちに自己を實現するために、階級的社會關係を形成する。だがかゝる社會的關係は支配者階級によつて把握されているのであり、被支配階級は把握されているのでしかない。

支配階級の日常的行為は被支配者の日常的行為を把握するものとして、被支配階級の日常的行為は把握されるものとして、

自己を形成する。

支配者階級の行為もまた日常的に物質的過程と交渉する行為である。ところが、彼の行為が他の行為と相異するのは、彼の利益に於て実現されることであり、他の否定に於てのみ、自己が肯定されるということである。

支配者階級は被支配者階級の日常的行為を否定し、收奪して自己の行為を実現する。ところが一方に於て、支配者階級の行為は被支配者階級の日常的行為を肯定し、維持し、それを否定から救わなければならない。

被支配階級が收奪を自覺して、自己の日常的行為を否定することは、支配者階級の覆滅であり、その行為の否定である。それ故に、收奪は被支配者階級の面前からかくされなければならない。だが、支配者階級の日常的行為そのものは收奪の行為として、蔽い難く被支配者階級の前に暴露せざるを得ない。かゝる暴露と陰蔽とは如何にして可能であろうか。それはまさに奇術であり、魔術である。

支配者階級の收奪の行為がかゝるものとして、彼の具体的行為として暴露されるのは被支配者階級の組織された行為の面前に於てである。被支配者の個々の日常的行為の前に、それは收奪の行為としてのすがたを以て出現しているのではない。それ故に被支配者は彼の日常的行為を收奪される行為として感覺的に反映することはできない。彼の日常的な言葉は收奪される者の意識に貫かれてはいない。むしろ愛撫され、育成される者の言葉を以て充されているのである。それは支配者が個々の被支配者に対しては、あたかも、愛の神であり、人道の権化たる者として、慈善的に、行為し且つそのような者として日常的な言葉を以て關係する過程を反映するものである。それは物質的利益の關係を以て現れるのではなくして、それを超越した抽象的な、人道的な行為としてもつばら理想と愛の言葉があらゆる古典からの引用を以て語られるであろう。だが、これらの言葉を以てしては、被支配者は救われることはできない。何となれば、それは惡魔の言葉であり、魔酔藥であるからである。

被支配者の端的な、物質的感覚的行為を反映する日常的な言葉は、いやしめられ、淘汰され、支配者的な上品な、非物質的、非感覺的な言葉がスタンダードな言葉として行われる。

支配者は厚顔にも、かゝる日常的行為としての言葉を以て、あたかも人間の日常的行為の把握としての、社会的・公共的な

行為の反映たる理論としての言葉をも、つくり出す。だが、それは収奪する行為たる収奪される者との關係行為を反映するのではない。

むしろ、與える行為として、與えられる者との關係行為の反映として、理論がつくり出される。

収奪する行為が與える行為として現れるのは収奪される者が分裂的に、個々に収奪者と關係するところに現れる。収奪される者は自己を実現する為に、収奪される立場を與えられるのでなければならぬ。そこでは、収奪、被収奪の關係は隠蔽されて、日常的行為——衣食住の感覺的行為を與える行為のみがある。

支配者階級は與えられる者の日常的行為の總體的把握たる、與える行為として、自己の日常的行為を理論的に反映する。だが、彼の行為は與える行為としては與えられる者との、分裂的な、個々面接的な關係行為としてのみ、許され得る。與えられる者が集約的にその行為を実現し、組織化されるどころでは、収奪者たらざるを得ない。與えられる者が集團的に、その組織を実現する場合、収奪者は被収奪者と關係するのみであつて、もはやそこには愛と人道とは消え去つて、物質的利害關係のみが立ち現れる。

社会の、公共的な關係行為を反映する理論としての言葉は、直接にかゝる収奪者の被収奪者との利害關係的行為を反映してゐるのではない。社会的・公共的・理論的な言葉はあくまで與えられる者の行為を集約的に把握する與える者の行為の反映として、あたかも人道主義的に抽象的に現れる。

だが、すでに見たように、與える行為は與えられる者の行為を集約的に組織化することはできない。むしろ、反対に與えられる者の組織を分裂せしめ、個々面接的に關係する行為としてのみ自己を実現する。

それ故に理論たらざる言葉が理論として現れてゐるのである。無理論的な理論が、階級社会に於ける支配者の理論の特徴である。それはまさに偽瞞であり、魔術であり、奇術である。

収奪者は自己の収奪者たる本質を陰蔽して、被収奪者の組織を分裂せしめ、もつばら與えるものとして個々面接的に與えられる者に対して偽瞞的に關係する。それは言葉だけの實質的行為をともしない行為である。

收奪者は收奪するために收奪される者に対して、收奪される行為を興える。のみならず、收奪される者に対して、常にその收奪の成果を以て、慈善的に、公共的に、興える。かくの如く、彼が興えうるのは、彼が收奪者だからである。彼はもつぱら興える者として自己を意識し、收奪者としての自己を言葉から疎外する。

收奪者が厚顔にも、神の天使であり、興える者として公共的行為者として、理論としての言葉を構成するのはゆえなきことではない。彼は收奪する行為を興える行為として意識する。何となれば、收奪する行為は收奪される者の組織的把握に於てのみ実現するものであり、かゝる收奪の行為が收奪として意識され、それが言葉として現れるためには收奪される行為が收奪される行為として意識的に関係するのでなければならぬ。收奪される行為が個々別々に、收奪する行為によつて把握され組織されているところでは、收奪の行為は興える行為として現れる。

收奪する行為は自己をながめることはできない。收奪される者によつて、ながめられ、把握されるのでなければならぬ。收奪される者が自己を興えられる者として意識し、個々別々に收奪者と面接しているところでは、收奪する行為をとらえることはできない。何となれば收奪されるものは個々別々に收奪者と面接することはできないのであつて、彼は統一的に自己自身を組織化し、全体として行為する以外に、收奪者の收奪的行為をながめ、且つとらえることはできないからである。

收奪される者が個々別々に面接する場合、收奪者は興える者として現れる。收奪の行為は收奪される行為の組織であるが、かゝる組織は收奪者が興えたものであつて、收奪される者自身による組織ではない。この場合收奪される者は個々に收奪者に面接するだけであるが、收奪者は個々に面接すると共に、その總体を把握し、組織しているのである。

收奪される者が個々別々の收奪される者をあつめて、自己の意識に基いて意識的に組織しはじめるや否や、收奪者はもはや興える者としての仮面をかなぐり捨て、收奪する行為の本質を暴露する。

收奪者は收奪される者との対談によつてのみ、收奪の行為を意識し、かゝる関係行為を言葉としてあらわす。收奪される者が階級として自己を形成する場合にのみ、收奪する者をとらえることができる。かゝる被支配者階級の運動によつてのみ、收奪者は收奪者として自己を意識し、彼の言葉は收奪する行為を反映する。だが、かゝる階級的形成の過程にあつても、收奪者

はあくまで、與える者として、個々面接的に、收奪される被支配者に關係しようとする。彼は慈善につとめ、人道を鼓吹し、被支配者の分裂によつて、かゝる彼の立場をあくまで固守しようとする。

こゝに彼の言葉が意識的な偽瞞の行為として成立する所以がある。のみならず支配者階級は彼自身の言葉を以て被支配者階級の自立的な組織的な團結を分裂に導こうと努めると共に、被支配者階級自体のうちに、自己と協同し、支持する同盟者を発見し、之を組織する。

あらゆる言葉が被支配者階級の團結を分裂し、弱化させるために現れる。

被支配階級の内部に集く墮落した裏切者がさまざまの行為と言葉を以て、現れる。道学的な、デカタンのな、人道的な、慈善的な、ありとあらゆる偽装的な言葉が、被支配階級を腐らせるために、與えられる者の世界に自ら進んで身を置かせるために、安穩な行為と頹廢的な行為を反映して現れる。

と共に、收奪されている者が自覺を以て、自立的に自己自身を階級として組織し、收奪者の收奪的行為を把握しはじめると否や、收奪者は與えられる者の總体的把握者としての與える者の言葉を以て、社会的公典的な行為を反映する。それは首切りを、彈圧をその背後にしのばせているとしても、與えられる者にとつては、従わざるを得ない言葉である。何となれば、收奪される者が自己を階級として組織し、收奪者と鬭争する場合、分裂的に收奪者と個々に相接する行為を絶対に拒否しなければならぬが、收奪者は意識的に收奪される者との個別交渉の行為に出でようとする。彼はかゝる個別交渉によつてのみ、收奪者对被收奪者たる關係から、與える者と與えられる者との關係に逃れることが出来るからである。それ故に、被收奪者が自己を守るために個々面接を組織的に彈圧しようとする行為に対してあたかもそれが基本的人權たる自由の迫害たるが如きデマゴグをとばす。だが、それは裏切りの自由であるに過ぎない。

さて、階級社会に於ける言葉は與える者と與えられる者との關係行為と收奪者と被收奪者との關係行為とを反映するのみでなく言葉それ自体が、さまざまの具体的効果をもつ行為として出現してくる。どのような言葉が、どのように行われるかということによつて、二個の対立する、關係行為の比重を変更することになる。與える者と與えられる者の關係行為を反映する言

言葉が収奪者と被収奪者の關係行為を反映する言葉に對して、權威的に、若しくは、何らの直接的な交互の作用なしに並行的に行われる社会は、興える者と興えられる者との關係行為の僞瞞性が暴露せられない、いわば支配者の地位が平和に保証せられている時代である。だが、言葉が収奪者と被収奪者との關係行為を反映して、社会の現實面に行われることは、興える者と興えられる者との關係行為を反映する言葉を批判し、淘汰し、かゝる關係行為そのものの僞瞞性を暴露するのみでなく、その消滅を實現する。興える者と興えられる者の關係行為は、その内部に収奪者と被収奪者との關係行為を包んで、いるのであるがかゝる内容の成熟に従つて外皮は破裂して、飛散する。二個の階級の闘争は激化し、収奪者が収奪される段階に到達する。封建的な、又はブルジョア的な言葉とその文化はその反映する実体的基礎を消滅して、僞瞞的な形骸だけをとりもつてあろう。これが階級社会に於ける基本的な言葉の対立と統一の道程である。

だが、言葉の対立の基本的な形態を一般的に理解するだけでは、かゝる階級社会に於ける言葉の形成を明らかにしたとはいへない。

どのような言葉がどのような者とどのような者とのどのような關係行為を反映して行われるか、具体的にしらべられねばならないと思う。すでに見たように、言葉は先ず興える者と興えられる者との關係行為を反映する。しかもかゝる關係行為自体が興える者の主動によつて、形成されていることはいふまでもない、興える者は常にその収奪を隠蔽して、あたかも、興える人間の果実が天興のものであるが如く振舞う。

かくの如き隠蔽は興える果実自体が人間の行為たる生産の果実を天興のものとして、興えられる者を天恵に浴する者とする考え方によつて可能となる。封建的な身分的な社会にあつては支配者は神として現れたのである。かゝる神を中心とした關係行為は中心的な神を取り囲む神々の群として、神系民族が神の國ならざる人間の世界を救うために、殺戮的な犯罪行為を展開する。

この世界ではものを「貰う」ことは「いたゞく」のである。人間の系列は、すべて神の系譜であり、中心的な神により近い者がすべて「かみ」であり、より遠いものは「しもじも」である。「しもじも」の者は「かみ」に對して「あなた」とすら呼

び得なかつた。「あなた」はもとと身に近き「こなた」に対する言葉であつたが、このような言葉は対面の際に、相手が自己より神に近く、已れに遠き、身分高く貴きものとして呼ばれた言葉である。「あなた」は「お前」の直接的な呼び方に対して、非感覺的であり、抽象的である。このような非感覺的な言葉すらも、支配者に対しては、なお人間的な臭味によつて、さけらるべきものとされた。それは「陛下」であり、「殿下」であり、又は「かみ御一人」でなければならなかつた。より具體的なならざる、抽象的な言葉ほど相手を敬する言葉であるとせられたのである。

だが、支配者对被支配者の關係は單に離間せられるだけでは保持することが出来ない。それはまた、あくまで自己を中心に自己に近く被支配者を組織しなければならぬ。それ故に神もまた人間的な、感覺的な言葉を私的には形成する。かゝる言葉の行為は裏面的に、社会に対して目かくしして、私的に親近者や後宮に於てのみ行われた。

公私の關係は言葉の分裂となつてあらわれたのである。それは公的な、人間の關係行為と、私的な關係行為の対立の反映である。

しかも、公的な關係行為は、いやしきもの、教育なきものには許されなかつた。いやしきもの教育なきものは、最も感覺的に物質的過程と交渉する日常の行為と、それを反映する言葉の行為を許されるだけであつた。そこには公的な關係行為は許されず、あつてもそれは單に一方的に支配されている關係丈があるに過ぎなかつた。

自己は「おれ」であり、相手は「おめえ」であり、與えるのは「くれる」であり、「與えられる」のは「もらう」である。それは相手に對して敬意を表するよりも相互の平面的な意識關係を反映しているものである。勿論、公共たる対支配者の關係に於ては、「おめえ様」があるが、そこには「臣……」もなければ、「わたくし」すらもない。勿論「いたゞく」こともない。それ故にこれらの階級は最もいやしむべきものとせられたのである。これが労働者、農民、小市民であつた。

この階級は日常的な行為を端的に感覺的にその言葉に反映し、かゝる言葉はまた直接に物質的過程との交渉の行為に影響する。だが、彼の日常的な行為は一方的に與えられているのであり、「おめえ様」と呼ぶことはあつても、呼ばれることはない。ところが、官吏、教員、会社社員は「旦那」であり、旦那衆であつた。彼等は「上」に対しては、「微賤」であつても、労働

者農民に対しては、直接に公共の当局であつた。それ故に、かゝる中間的な階級は「お前達」を以て相手と呼ばなければならなかつた。と、同時に中間階級相互の間では、「あなた」と「わたくし」として対面し、「いたゞく」がその關係に基いて成立した。

政治的経済的な社会の上層部は、これ等の中間的階級との接觸に當つて、公共的な言葉と、私的な言葉とを區別することによつて、自己の階級的優越を示さなければならなかつた。この階級は自己に対して「遊ばせ」を要求し、「ございます」を極端に好んだ。「いらつしやいませ」「お出かけ遊ばせ」がこの階級内部の關係を反映して行われると共に、この階級が支配する階級に対しても、支配的権力關係に基いてその勵行を強要した。この階級は専ら、正義、人道、社会に就いて説教して、自己の支配的立場を擁護し、自己の階級内部の行為關係を人道の理想として宣傳した。彼の言葉は無智なる庶民に分らせられなければならなかつた。

言葉の教育は分裂せる階級相互の關係を、支配者を中心として再形成するために行われなければならなかつた。専ら、與える行為と與えられる行為との正常的關係を反映するための言葉が選ばれて標準とせられた。與える行為としての公共的な、支配者的な、理論的な言葉の習得と、與えられる者としての日常的な言葉の陶冶とが言葉の教育の目標であつた。かゝる教育の対象は中間階級であり、またそれは中間階級的な行為を反映するものでもある。何となれば、労働者、農民にとつては、公共的な言葉の必要な主體的客觀的條件がないからである。労働者農民は公共性を以て自己の日常生活を支配されることは當然としても、公共的に他に向つて關係し、之を支配するが如きことは、現段階に於てはあり得なかつたからである。

封建的な社会に於て、公共的な言葉が抽象的に思维的に行われ、日常的な言葉は感覺的な行為關係であるとしたが、最も純粹にこのような意味で日常的な言葉をもつのは、失うべき何物もまたない労働者階級であり、最も支配者的な公共的な言葉をもつのは、絶対的専制君主であり、次でその機關たる官廳であつた。そして、中間的な階級は漸次、上層部に向つて上昇するに従つて、その日常的感覺性を拂い落して、思弁的な抽象的な公共的な言葉の行為を自己の日常的な言葉の行為とするに到る。それは神に近き言葉である。それは感覺的な、動物的な、現實的な言葉の關係行為を出来るだけ拂拭して、神に似た世界

を作りあげようとする行為ではある。だが、如何なる主観的意図にかゝらず、遂に人間はその動物的感覺性を脱ぎ去ることとはできない。神になろうとする人間の悲劇は、人間が神になることはできないという自覺に立ち得ない。あわれむべき無智に引きずられて、神たるべくあがき、また神の如く装うところから起る。

このように考えると、労働者農民の言葉は最も人間的な言葉である。だが、ブルジョアの封建的社会に於ては、人間的な言葉は最もいやしめられ、淘汰されて、中間階級的な言葉に意識的に置き換えられようとする。それは中間階級が最も従順に支配者による把握をうけて、その行為が半ば支配者的であるからである。と、同時に労働者農民が引き上げられて、かゝる中間的階級への昇進を許されることは、支配階級による個々面接的な分裂工作にとつて、最もよき條件を提供するからである。

さて、ブルジョアの封建的社会に於ける言葉の行為の最も典型的な、日常的な行為と公共的な行為との一体的な現れは、之を次の言葉に見ることが出来る。

「朕惟うにわが皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり、わが臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして……」
という言葉にはつきりと示されているように、國を経営する公共的な行為と、徳をみがく日常的な行為とが一体化されて居り、それは具体的には被支配者階級に対する忠孝の強要であつた。それは反面に被支配者階級が自らに與えられた日常的行為を、支配者によつて與えられたものとして、日常的行為——労働——の一切を以て、公共に奉ずることが、その当然の責務でもあるが如き錯覺を呼び起した。それは支配者の言葉を神の言葉として稱呼するとすれば、あたかも被支配階級は戯画化され、また本神に追隨する神々の言葉を用いたと云えるであらう。それは中間階級の言葉である。

だが、基本的な、賤しめられた労働者と貧農の階級だけが、物質的な、感覺的な、人間的な日常的な言葉を用いて、教育による神々の言葉の浸透から僅かに身をのがれたのであつた。

敗戦はかゝる擬似神の仮面をはぎ、人間の世界につきもどした。それは與える者と與えられる者との關係の關係行為として表現されていた支配關係を、はつきりとさらけ出したのであつた。

敗戦がはいだ仮面は戯画化された神を人間につき戻しただけではなかつた。それは單に神々の人間還元の鍊金術であつたの

みでなく、神と神々こそ最も俗悪な收奪者たる本質を暴露したものでなかつたか。ポツダム宣言は明瞭に神と神々の帝國主義的侵略のみでなく、その國內的收奪をも指摘している。

ポツダム宣言は與える者と與えられる者の關係行為を否定してはいない。それは正常な資本主義体制の存続を否定しているものではない。だが、與える者と與えられる者との關係行為そのものが、與える者の僞瞞的な組織の仕方によつて、形成されたものであるとする暴露は、同時に與える者を排除する働く者の自覺と自主的組織を促す條件を作り出したのであつた。

與える者の指導的な立場を以てする、與えられる者との協同建設の方式は收奪者と被收奪者との闘争を通ずる、被收奪者たる働く者の手による、働く者のための、民主主義社會建設の方式にとつて代らなければならない。敗戦は資本家地主の壊滅をもたらし、大開利得的な大收奪を防遏し得さえするならば、かゝる者の階級的支配構成から逃れることが出来るのである。敗戦を境として、與える者と與えられる者との關係行為の社會から、收奪者对被收奪者との意識的闘争の社會への急角度の移行が進行しようとしている。

與えた者はかつての如く與え得るのではないが、なお與え得るが如く個々に與えられる者としての境涯に被支配階級を分裂的に残置せしめるために、頽廢的な、僞道義的な、僞裝や平民的な言葉を以て、民主主義の神に僞裝する惡魔の触手をのびしている。

頽廢的な文藝作品、僞裝せる人道主義的理論その他が出現しているのみでなく、日常的な言葉の改造として、所謂標準語が官僚の手によつて再編成されようとしている。かゝる一連の言葉に対する支配者的な運動は働く者の自覺によつて打破されなければならない。そのような支配者的な方式による標準語運動は働く者の言葉を再分裂せしめるだけであつて、社會的に言葉の統一を実現し得るのではない。

さて、收奪者被收奪者の關係行為は、自覺と闘争によつて、やがて收奪者による被收奪者の囚縛を解放し、收奪者を克服し、打破する組織運動を以て開始される。被支配階級の組織は、支配者が與える支配者的社會組織のうちに、自己を自己自身のために再組織し、之を貫徹することによつて、支配者的組織を打破する。

支配者の組織が興える者と興えられる者との關係行為として、個別的に面接しあい、社会を把握しようとするに對し、被支配者の組織はあくまで集團的に、ばらばらの意志の統一を以て、自己を主張する。従つて、彼の被收奪者の利害の共通が、個別的な日常的行为を一の組織にまで統一し、共通の目的實現のための自覺に於ては、彼の日常的行为の自由を公共的な宣言と綱領の範圍内に於て確保し、實現する。それ故に、階級相互が意識的に闘争する社会に於ては、行為そのものが先ず以て、公共的な行為から基準を興えられる。

被支配階級の階級としての自覺的な行為が宣言を以て、公共的な、理論的な言葉を以て始まるのはけだし故なしとしないのである。

理論的な、公共的な言葉は日常的行为の集約的把握の上に、その考察の成果として確立するのであるが、しかもこれは成立するや、否や逆に日常的行为を律しはじめる。日常的行为を直接に反映する・庶民的な言葉は急速に駆逐されて、堂々と收奪者と對等に直面する言葉がその日常的行为を反映する言葉として登場する。そこには庶民的な言葉としてもつていた奴隷のもつている卑屈さ、陰險さ等々の性質は漸次、影を潜めざるを得ないであらう。

被支配階級は解放を宣言するや否や、支配階級に對して階級として對等を主張するのみならず、個々面接の場合に於ても、なお對等を主張し、收奪者の興える行為が實際には收奪する行為の変形せる偽瞞に過ぎないことを發見せざるを得ない。それ故に彼の個人的日常的行为が自身の收奪の暴圧に抗する、堂々たる、だが働く者同志の人間の愛情に貫かれるものとして轉形する。かゝる日常的行为の轉形を反映して、否、むしろかゝる行為關係の要素として、日常的な言葉の行為もまた轉形する。

被支配階級はその庶民性に於ては、興えられる者として専ら興える者に對して、受容的に興える者の言葉に接するか、感覺的に日常的本能的行为を直接に反映する日常的表现を以て相互に相接觸する。それは卑俗な、限局された狹隘な・無智要素によつてみられるか、支配階級の言葉の華麗さに圧倒されて、それに追隨する空虚な、實質的な背景をもたない言葉にたり終る。被支配階級は自覺せざる庶民性に於ては支配階級に對立する自らの言葉をもつことができない。支配階級によつて、いやしめられ、淘汰される言葉はもち得ても、支配階級の言葉に對しては、もつぱら受容と聽従と感服とが強要されるだけである。

被支配階級の本来的な感覺に基く素朴な愛情の言葉にしても、信義の言葉にしても、支配階級の言葉の受容が強要されている社会にあつては、絶えずその発達を妨害され、傷けられて、その変形を強要される矛盾に逢着する。だが、支配者的な組織は、被支配階級の本質に基く言葉を社会から駆逐し、一切の支配階級に対する日常的な不平、不満乃至は單なる經濟的、端的な、労働者の、農民の、それぞれの特性に基く言葉すらも、強權的な彈圧の下に窒息せしめようとする。

被支配階級の階級としての力の自覺と組織と團結とは、自己を屈從的な卑俗な日常的な言葉から解放し、支配階級との鬭争過程に於て、自らの行為を自らの自覺を以て再組織し、建設し、他面、支配階級の偽瞞的な遊面にみちた公共的な言葉を批判し粉碎する。

のみならず、被支配階級の力の増大は徐々に支配階級自体の言葉をも変更せしめる。支配階級はもはや神の言葉を以て、被支配階級との個々面接を企てようとはしない。政治的自由の段階にあつては、もはや封建的な神の言葉は人間的な行為關係を反映し得ないからである。だが、かゝる段階にあつても、支配階級は與える者の立場を捨ててゐることは出来ない。支配階級は破れかゝつた。すでに正体を見破られた袈裟をまとつて、あくまであたかも彼が與えるかの如く、「黄金」を「給與」と呼び、かゝるものとしての組織の維持のために、必死の努力を傾注する。

支配階級は最早や古典から得て来る神の言葉を以て、人民に対する呼び掛けはしないとしても、この階級自体のうちに成立の根基をもつか、または中間階級の内部關係を反映する言葉を以て、働く一般大衆に對面しようとする。だが、與える立場を保持し、與える者として與えられる者に接する言葉である限り、それは絶対にその偽瞞性と魔酔藥的な要素を脱却することは出来ない。被支配階級は絶えずそれを批判し、粉碎しなければならぬのである。

被支配階級は支配階級がもつ階級的な言葉の構成を批判する。組織の内外に對して呼び合う言葉が、その組織的行動過程から修正される。抽象的な、晦澁な言葉が、端的な感覺的な言葉にとつてかわられる。仲間に対する言葉と外に対する言葉が変更する。新しい道徳がこれと共に、徐々に古い道徳を破碎する。新しい言葉の感覺が古い感覺にとつて代る。

これらの言葉の変化は支配階級との鬭争過程の途上に、働く者自体がかゝるものとして團結し、鬭争すること自体のうちに

発生し、成長し、徐ろにその力關係と行為關係の変更に対応的にもたらされるものである。

言葉の最も特徴的な変更は、公共的な言葉と日常的な言葉とが、與える者と與えられる者の關係行為の反映としては不可避的な対立であつたが、被支配階級の自覺せる組織の内部に於ては、公共的な言葉自体が物質的な理論として、その日常的行为を把握して感覺化するのみならず、日常的行为と結合する感覺的な言葉が公共的に被支配階級としての自覺と、対支階級鬭争の理論として鍛えられるが故に、理論と實踐の背馳対立と共に、言葉の公共性と日常性との対立もまた解消せざるを得ない。

支配階級が形成する社会に於ては與える者が公共的行為者であり、與えられる者が日常的行为者であつた。それ故に、公共的な言葉と日常的な言葉との分離対立は不可避的であつた。被支配階級の自覺に基く社会に於ては、公共的行為自体が日常的行为と一体化し、日常的行为としての働く人民大衆は彼の日常的行为の上は、收奪された公共性を奪い返すために鬭争するのである。いわば、被支配階級の一切の被收奪の根元はかゝる公共性と理論との收奪によるものであるとも云い得るのである。あらゆる公共的な機關の公共性が、大衆の日常的行为の組織化の上に構築され直すこと自体が、その解放運動の目的であり、彼岸でなければならぬでもあらう。

日常的行为からの公共性の收奪が支配階級の收奪の根元である。それ故にこそ理論としての言葉は、労働者農民から奪われていたのであり、その事によつて支配者はあらゆる日常的行为をその掌中に收めて、あたかもそれが管となつて、あらゆる人民の膏血が搾取されたのであつた。かゝる吸血管を断ち切ることなしには、被支配階級は彼自身の自由な、人間としての言葉をもち得ないであらう。

封建的な、又はブルジョア的な文化としての言葉が、與える者と與えられる者との關係行為の言葉としての定着によるものであるとすれば、プロレタリアの人民的な文化としての言葉は、收奪者と被收奪者の意識的階級鬭争の行為を反映した言葉の日常的行为が定着したものである。

與える者と與えられる者の關係行為を反映する言葉は、窮極に於て與える者の（支配者の）言葉であり、文化である。それは天使の仮面をかぶつた惡魔の言葉である。華麗な衣裳をまといつてはいるが、血に塗れた鉄の棘をその内部に藏する偽りの言

葉である。

收奪者と被收奪者との闘争關係の行為を反映する言葉は、窮極に於て收奪されるプロレタリアートの言葉であり、文化である。それは相互の自覺を促す素朴な宣言からはじまる、それはまとう外装はまずしいにしても、與えられた衣裳を脱ぎ棄てるに従つて、脈々たる人間的な血の運行がはつきりと現れてくる言葉である。

惡魔に奪われた言葉が人間にとり戻されなければならない。壯麗な與える者の文化の終焉は、その内実たる收奪をなす公共的な理論的な言葉が、大衆の日常的な言葉の上に感覺性を以て取り戻されたときに訪れる。それは解放の闘争宣言が働く者の日常的行為の自由を実現することである。

だが、われわれが忘れてならないことは、支配者的な言葉も、被支配者的な言葉も、一方は眞實を反映し、一方は偽瞞行為であると指摘するだけでは、足りないということである。その一方は與える者と與えられる者との、他の一方は收奪する者と收奪される者との關係行為を以て、共に社会と歴史の物質的過程を反映しているのである。それはあたかも歪曲せる凹面鏡が眞實の姿を写し得ざるが如く、物質的過程の正しい反映ではあり得ないとしても、なおかつ映される物質的過程そのものは、唯一の最後のなものである。それ故に、偽瞞せる惡魔の言葉からも、われわれは逆立ちした眞實性を受け取ることが出来るのである。惡魔それ自身が実に人間の化けたものであり、物質的存在である。それ故に、批判の作用に依つて、窮極的には與える者の、凹面鏡的な言葉にもまた物質的根柢を読みとることが出来るのである。

さて、われわれはたえず惡魔の言葉をも、常に歪められた人間の言葉として、人間的關係から之を受取る。如何なる言葉もはじめから之をことわることはできない。だが、之をわがものとして了解するや否や、われわれは之を共同の宣言の立場から批判し、ことわることが出来るのである。

言葉の原基的な行為形態は表現と受容の行為がそれを成立させるものであり、かゝる行為の複合が與える者と與えられる者との關係行為として社会的な關係行為を形成する。だが、收奪される者が自己の解放を宣言し、收奪者と正面から衝突しはじめるや否や、一切の逆立せる言葉の本来的な物質的基礎が暴露されざるを得ないのである。

かくの如き暴露と消滅の中から、新しい言葉の行爲が眞実の人間の關係行爲として誕生し、成長するであろう。それはプ
レタリアートの言葉であり、働く者の言葉である。

附記

この文は久松潜一氏編「國語國文学教育の方向」に掲載された拙稿「原基的な言葉の行爲過程」につづく覚書である。

しかし、この覚書は終戦直後に書かれたものであり、今日から見れば若干修正の餘地があるうと考える。なお、念のために断つて置くが、私は一切の人的な力關係を合法的な枠の中に表現しようとするものであり、暴力主義的傾向に対しては斗争ものであることを附記する。